



イラスト 尾上樹里 (北海道教育大学 大学院生)

# 異世代教師連携による 保護者支援を語るワークショップ

保護者支援をともに学ぶ教育者ネットワーク  
エデュサポネット Educator Support Network  
2020 年度版

## はじめに

異世代の学校教師たちが、保護者支援を語り合い、互いの経験から学び合うことを目指したこのワークショップは、平成 26 年度から始めた『保護者支援の経験交流研究会』の活動から誕生したものです。お蔭さまで、多くの学校教師のみなさんにワークショップの趣旨に賛同をいただき、ワークショップを開催してきています。この度、ワークショップの手引きを作成し刊行することで、より多くの学校教師のみなさんにワークショップにふれていただきたいと考えました。

今日、核家族化が進み、地域のつながりは希薄化し、経済的格差が広がる等の社会情勢を背景に子育てに困難を極める家庭、保護者への対応に苦慮する学校教師が増えています。私たちが開発してきたワークショップは、困難な状況に置かれている学校教師たちが、直接、効果的なこたえを導き出すようなものではないかもしれません。

保護者支援とは、最初から正解のある問題とは異なる臨床的課題です。関係者が知恵を出し合いながら解決に向けて、子どもの最善の利益を叶えるために保護者とのようにパートナーシップを結ぶことができるかを求められる課題です。そのためには、たとえば保護者の希望や学校が対応可能なことはなにかという多様な観点を検討し、現実的な対応を探ることが肝要です。したがって、教師たちの経験が活かされ新たな知を創造していくワークショップが役立つと考えます。

この手引きを手にしてワークショップを実施されたみなさんには、忌憚のないご意見をお寄せいただきたくお願い申し上げます。

ワークショップ開催にご協力いただいた先生方に、衷心より感謝申し上げます。

なお、JSPS 科研費 26350304, 19K02995 の助成、北海道教育大学学長戦略経費(平成 30 年度)の助成を受けています。

2021 年 3 月

保護者対応を語る異世代教師たちの経験交流型ワークショップ開発に関する研究(科学研究費助成事業)

研究代表者 植木 克美(北海道教育大学)

## 目次

### はじめに

#### **PART1 保護者支援における教師の学び合い**

- 1 今日の保護者支援
- 2 異世代教師たちの学び合い
- 3 保護者に支えられ成長する教師たち

#### **✿ コラム1 保護者とのかかわり**

- 4 お互いの成長を支え合う教師たち

#### **✿ コラム2 教師たちの「炉辺談話」からの学び**

#### **PART2 教師たちの学び合いを支えるワークショップ**

- 1 教師たちの自主的自発的な学びとワークショップ
- 2 ワークショップの基本

#### **PART3 保護者支援を語るワークショップ**

- 1 ワークショップの趣旨
- 2 ワークショップのねらい
- 3 ワークショップの流れ
- 4 ワークショップの人数
- 5 場づくり
- 6 準備するもの
- 7 事前の準備
- 8 ワークショップの進行

#### **✿ コラム3 ワークショップに参加して**

### 引用文献

# PART I 保護者支援における 学校教師の学び合い

## I 今日の保護者支援

学校教育において未来を担う子どもたちの成長を支えるために、保護者とのかかわりは必須のものです。今後より一層、次世代を育成していくパートナーとして学校教師と保護者が相互にかかわっていくことを求められます。

しかし、近年、核家族化、地域のつながりが希薄化し、経済的格差が広がる等、子育てに困難を抱える家庭、保護者が増えています。そして、学校は保護者からの要望・苦情等への対応に苦慮することが多くなったと言われます。その一方で教師が保護者たちに助けをもらい支えられたということは、今日でもあります。このような状況にある保護者たちとのかかわりを、教師はどのように進めていったらよいのでしょうか。



ジュリさん  
エデュサポネットの  
メインキャラクタ  
将来、教師を  
目指し勉強中



なみちゃん  
ファシリテータで、  
ワークショップの進行役

イラスト 尾上樹里(北海道教育大学 大学院生)

## 2 異世代教師たちの学び合い

学校教師は、お互いに経験を語り合い、支え合うことで課題を解決していくとされます (Aspinwall, 1986)。たとえば、中原ほか (2015) の調査によると、若手教師は保護者とのかわりて困難を抱えた時に、経験豊かな先輩教師たちの支えによってその困難を乗り越え、自らの成長を感じ取っています。

しかし、近年、学校教師の多忙化や教師たちの年齢構成のバランスが崩れ、支え合うことが難しい状況に教師たちは置かれています。文部科学省が行った平成 28 年度学校教員統計調査では、小学校教師の勤務年数は最も割合が高いのは 5 年未満の 19.5%、次が 5 年以上 10 年未満の 15.8% です。これに対して、15 年以上 20 年未満は 6.1%、そして 20 年以上 25 年未満が 9.0% と割合が低くなっています。

このように、教師コミュニティでは年齢構成のアンバランスが起こり、先輩教師が若手を支援する世代継承が危機的状況にあります。そこで、異世代の教師たちの学び合いをサポートするために保護者支援について語り合うワークショップを私たちは考えました。Johnson-bailey (2010) によれば、集団で語り合うことで新たな語りが創造され、語り合いをコミュニティのエンパワメントの源にできるとされます。つまり、学校教師たちの語り合いが教師自身の力で課題を解決していくことができる教師コミュニティを発展させていくことにつながるのです。私たちは、教師たちの学びのコミュニティを構築していくために、異世代教師たちの創造的な語り合いの場となるワークショップを考えています。

また、今般の幼稚園教育要領、小学校学習指導要領等の改訂では、たとえば幼小という学校間の円滑な接続が大切にされています。今後の学校教育ではより一層、異校種の教師たちの意見交流や学び合いが重視されると考えます。

未来を担う子どもたちの学校教育を充実させるために、異世代教師たち、そして異校種教師たちが保護者支援の経験を語り合うことで、教師コミュニティを教師自らが組織する力をもつことはとても大切なことです。ワークショップは、教師が問題解決力を高めることができる、教師の自発性、自主性が尊重される活動です。

### 3 保護者に支えられ成長する教師たち

図1は、現在の熟年教師たちが若手教師時代に経験した教師を支える関係を図に表したものです(植木ほか, 2017)。熟年教師たちの若い頃は、同僚教師に支えられるだけでなく保護者からも支えられていることがわかります。学校教育の場は子どもの育ちを教師が支えますが、その教師を支える先輩教師、保護者の存在があります。

保護者が教師を支える関係では若い教師を保護者が励ますという情緒的支援が中心になっていますが、保護者が教師に気づきを与えることもあります。たとえば、保護者が家庭での子どもの様子を若い教師に話して聞かせてくれることで、若い教師は学校とは異なった子どもの様子を知り子ども理解を深めることができます。

この保護者が学校教師を支える関係において提供される支援は、ソーシャルサポートとして働きます。Antonucci et al.(2010)はソーシャルサポートを取り上げている研究を整理し、ソーシャルサポートを情緒的、情動的、道具的、評価的、そして予期されたサポートの5つに整理しています。若い教師に保護者は情緒的サポート、つまり安心や尊敬等を提供し、問題解決の手助けという情動的サポートも提供していることがわかります。

なお、学校教師を応援する保護者は減ったとされる近年においても、若手教師が年長の保護者によって支えられ成長していることがわかっています(植木, 2017a)。

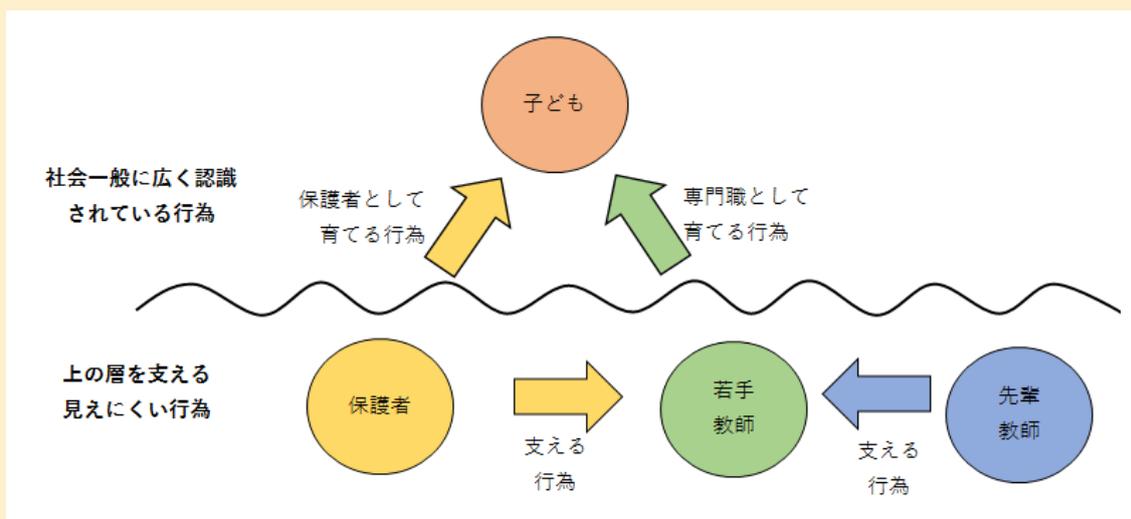


図1 熟年教師の若手教師時代における教師を支える関係

教育には次世代を育成するという、学校教師特有の専門性があり、子育てにおける次世代の育成と共通性があります。だからこそ、年長の保護者が次世代の若手教師を支えるという関係が自然に形成される文脈を教育現場はもつのかもかもしれません。



## コラム1

### 保護者とのかかわり

浪岡美保

病弱な Aくんは通常の学級の高学年でした。小さい頃からよく知った仲間の中で楽しそうに生活していました。ご両親の「友だちと楽しく学校生活を過ごせばいい。」という言葉もあり、Aくんの担任である、当時、30代半ばの私はすっかり安心していました。しばらくしてAくんが受けた教育センターの相談で理解する力の発達がゆっくりしていることがわかりました。みんなと同じようにできていると思っていた私は「Aくんのことを何もわかっていなかった。どう指導したらいいかもわからない。」とご両親の前で泣いてしまいました。ご両親は「先生、元気で学校に行ければそれでいいんだ。」と慰めてくれたが、私はそれでは教師としての役目を果たしていないと思ったのです。ご両親の理解もあり、次の日からお母さんと私はAくんの学習について話し合いを始めました。それは卒業まで続きました。ご両親への深い感謝と共に、この出会いが特別支援教育を私が学ぶきっかけとなったことが思い出されます。

高橋道也

特別支援学級の担任であった私には、30数年間の教職経験の中で特に印象に残っている保護者とのかかわりがあります。ある日の放課後、校長室に呼ばれました。そこには入学を控えて相談に来ていたご夫婦がいました。知的な遅れの大きいお子さんでしたが、通常の学級に入れるために頑張ってきたので、通常の学級で学ばせたい、という内容でした。数回に渡って面談することになりましたが、最終的にはご両親は特別支援学級で学ばせるという気持ちになりました。入級後は、通学の自立、生活面の自立、自分から取り組もうという学習への意欲の高まりを見てご両親は喜んでいました。その後も、保護者と私はお子さんの育ちの目標を共有しながら、連携していくことができました。私たちは、お子さんの成長を共に喜ぶことができたのです。子どもの成長を共に支えていくために、学校は保護者とのかかわりを大切にしています。

※個人情報等保護のため、内容を損なわないようにして表現を工夫しています。

## 4 お互いの成長を支え合う教師たち

教師が保護者とのかわりて困難を抱えたときに、支えてくれる重要な他者として同僚教師が登場します。

先輩教師が若い教師に提供するサポートが情動的サポートと道具的サポートです。先輩教師による情動的サポートにはこのような場合はこうしたら良いという具体的なアドバイスなどがあります。また、道具的サポートは個人に与えられる特定のモノやサービスとされ、若い教師にとり先輩教師が保護者面談に同席することは道具的サポートであり、一人ではないという安心感をもつ情動的サポートにもなります。このように教師コミュニティでは情動的サポートや道具的サポート、そして情動的サポートが提供されています。

ところで、保護者とのかわりに学校教師たちはどのような力が必要であると考えているのでしょうか。図2は、現在の熟年教師が語っている若手教師が保護者にかかわるときに必要なだと考えているコンピテンシーを図にしたものです(植木, 2017a)。Spencer & Spencer (1993)の「コンピテンシーの氷山モデル」を踏まえて、保護者対応を行う際に必要な能力を、「見える能力」と「見えない能力(見えにくい能力)」に分けて表しています。

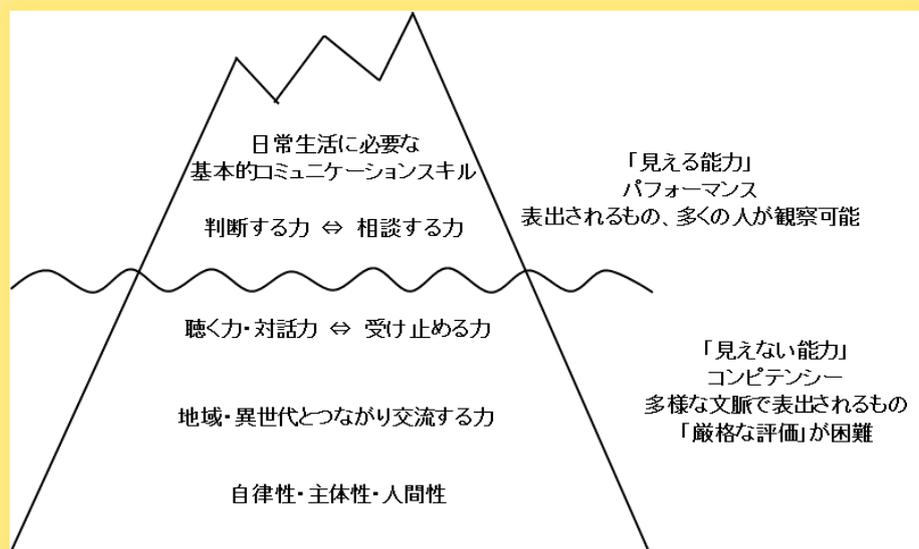


図2 熟年教師が考える保護者とのかわりにおいて若手教師に必要な力

(植木, 2017a)

熟年教師は、「見える能力」として日常生活に必要なコミュニケーションスキル, 判断する力, 相談する力を, そして, 「見えない能力」として保護者の話を聴く力・対話力, 受け止める力, 地域・異世代とつながり交流する力, 自律性・主体性・人間性を大切にしていることがわかりました。「見えない能力」は教職経験を重ねていく中で「見える能力」になり, 熟年教師は自分の経験を伝えたり, 自分のやり方を見てもらったり, あるいは若い教師の気づきを待つことで, 若手教師の「見えない能力」を育てようとしていることがわかりました。

近年は, 教師の多忙化により教師たちのかかわりが少なくなったと言われ, 学校環境の変化等により炉辺談話, 廊下の会話といった日常的コミュニケーションが教師たちの中でとりにくくなっています。また, 熟年教師からは若手教師に保護者支援で困ったときには抱え込まないで相談して欲しいといった声も聞かれます。



## コラム2

### 教師たちの「炉辺談話」からの学び

氣田 幸和

若手であっても教職経験が少なくても、子どもたちは、全幅の信頼を置いて、先生として慕ってくれます。それゆえに、若手であっても責任は重く、一挙手一投足が厳しい目にさらされます。数々の責任ある仕事に直面し、迷い、考え、悩むこととなります。毎日の授業はもちろんのこと、子どもとの接し方、保護者との対応等々、先輩教職員や管理職からヒントをもらい、助けられながら、必死に過ごす日々が続きます。

学校現場では、学年研修や校務部会、職員会議等々、教職員が協力し助け合いながら仕事を担える組織が機能しています。若手の教職員が、目指す子どもの姿を具体的に捉えたり、より効果的な指導にするためのコツなどを教えてもらったりなど、計画的に進める教育活動の指導技術やセンスを学ぶためには、とても効果的な場となります。こういった「フォーマルな学びの場」でアドバイスや指導をもらうことは、自らの基礎・基本を培うために、重要な機能を果たしています。

一方、教育活動は先生、子ども、保護者といった、人と人との関係の中で進められるものです。それゆえに、受け止め方の違いからくる不信感、経験不足への先入観、コミュニケーション不足などが原因で、様々な問題が生じることがあります。

こういった問題の対処においては、炉辺談話のような「カジュアルな学びの場」で、問題状況を脱却するためのヒントを得られることが多いのです。それは、近い距離での少人数の対話だからこそ、本質を深く捉えたやりとりになるからです。先輩教職員の類似した問題での対処経験、今だから話せる失敗談、当事者とは違った角度からの分析といった対話を通して、経験が少ない若手教職員の視野が広がったり、子どもや親の言動の奥にある本音に目が向いたりする場になるのです。

自分自身の経験を振り返ると、若手期、中堅期には、炉辺談話の場で多くのヒントを得ることができました。しかし、現代の職員室では、このような場を設けることが難しくなっていることが、頭の痛い問題です。

# PART2 教師たちの学び合いを 支えるワークショップ

## 1 教師たちの自主的自発的な学びとワークショップ

木原(2016)は、教師の能力・資質を育むために、教育現場の問題解決に実践的に取り組むアプローチを5つにまとめています。このうちの1つとして、環境設定アプローチをとりあげています。木原によると、環境設定アプローチとは「教員志望学生や現職教員がその能力・資質を高めるために、それを可能にする「学習環境」を彼らに提供しようとするアプローチである。」と説明されています。そして、このアプローチの注目する概念やトピックスとして、ワークショップ型教員研修の企画や運営が示されています(たとえば、村川, 2016)。学校教師たちが知識や技術を獲得すること、そして問題解決力の向上の機会を得ることができる活動として、ワークショップ型研修に期待が寄せられているのです。

ところで、ワークショップとはどのような活動なのでしょう。堀(2008)は、ワークショップという場は参加者がそれぞれもちよる秘められた知恵とやる気を引き出すとします。そして、知恵とやる気が相乗的な効果を発揮し、予想もつかない力を生み出していくといいます。参加者が自由に対話できる関係づくりと少しの後押しをファシリテーターが行うことで、その集団が本来もっている力を解き放ち、自ら変革していけるというのです。このような特徴から、堀はワークショップを「主体的に参加したメンバーが協働体験を通じて創造と学習を生み出す場」としています。また、ワークショップの5つの要素として、①参加、②体験、③協働、④創造、⑤学習、をあげています。

堀によると、ワークショップという方法は、特定の誰かが開発したものではありません。そして、中野(2017)はワークショップの原点として、ネイティブ・アメリカンの輪(サークル)になって座り、一緒に創る活動を紹介しています。輪になって座り、一緒に食べ、話し、踊り、すぐに答えが出ない難問や正解がない問題を、みんなで一緒に知恵を出し合い、年齢や経験の差を超えて、対等な関係で考えていこうとすること、それがワークショップの本来の意味であると、中野は説明しています。

保護者支援という最初から正解のある問題とは異なる臨床的課題にアプローチするには、たとえば保護者の希望や学校が対応可能なことはなにかという多様な観

点を検討し、現実的な対応を探ることが肝要です。したがって、参加者の経験が活かされ新たな知を創造していくワークショップが保護者支援の研修として有益であると考えます。



イラスト 尾上樹里(北海道教育大学 大学院生)

## 2 ワークショップの基本

ここでは、一般的なワークショップの概要についてお伝えしていきます。ワークショップには、参加する人たち、プログラム、そして活動を進行していくファシリテーターと呼ばれる人がいます。堀(2008)は、ワークショップを構成するこれら3つの要素を次のように説明しています。

- －①チーム(グループ)     どんな人をどんな場に集めるのか？
- －②プログラム             どんなシナリオに沿って活動を進めるのか？
- －③ファシリテーター     その場で活動をどのように舵取りするのか？

そして、堀はワークショップを実施するには、参加者の**安心できる場**をつくることがファシリテーターに強く求められるとします。ワークショップでファシリテーターが心得る3つのルールがあります。

- －①互いを尊重する
- －②参加者の主体性を尊重する
- －③段階を踏んでレベルを上げる

また、中野(2017)、川嶋・中野(2018)は**創造的な対話**を活性化するために、ファシリテーションの基礎スキルとして5つを考えています。そして、話し合いの場を和気あいあいとしたなごやかな雰囲気にしてくれるツールを大切にしています。

- －①場づくり
- －②グループサイズ
- －③問い
- －④見える化             思考や対話の見える化
- －⑤プログラムデザイン     時間の設計、空間の設計、関係性の設計(ひとりで考えるのか、グループで考えるのか)

異世代、異校種の学校教師たちという多様性のある参加者を対象にする私たちのワークショップでは、何よりも**安心できる場**をファシリテーターが参加者と一緒に創りあげていくこ

とが必要になります。そして、保護者支援の経験というセンシティブな内容が語られる場では、語られた内容を大切に扱っていかねばなりません。



イラスト 尾上樹里 (北海道教育大学 大学院生)

# PART3 保護者支援を語る

## ワークショップ

次に、私たちが考案したワークショップのプログラムを紹介していきます。異世代、幼稚園、小学校や中学校といった異校種、そして、通常学級の担任、特別支援学級の担任や養護教諭、校長といった先生方に一緒に参加いただけるように、参加者の多様性に対応できるプログラムとしています。もちろん、熟年の先生方同士での語り合い、養護教諭の先生同士の語り合いという共通性の高い参加者同士でも実施いただけます。

なお、私たちは対等なごやかな対話ができるように、輪（サークル）の形態を追求してみました。

### 1 ワークショップの趣旨

今日、未来を担う子どもたちの成長を支えるために、学校と地域社会、そして家庭の連携・協働が必要とされています。しかし、地域の結びつきが弱くなり、経済的格差が広がるなかで、多忙で親子の時間をつくれないう、経済的に困窮している、保護者に心身の疾患がある等のことで子育てに難しさを抱える家庭が増えています。このような状況におかれている保護者たちとのかかわりを、学校教師はどのように進めていったらよいのでしょうか。

学校教師は、お互いに経験を語り合うことで課題を解決していくとされます。このワークショップでは保護者とのかかわりについて、その経験を4、5名のグループで一人ずつ順番に語りながら交流していきます。先輩や同輩、後輩の先生方、そして異校種の先生方同士で経験を語り合い、保護者支援を考えていきます。

## 2 ワークショップのねらい

3つのねらいがあります。

- ① 世代の異なる先生たちで保護者支援の経験について語り聴き合い、保護者支援で困っていることを交流し合います。<困っていることを聴いてもらうことで、気持ちが楽になります!>
- ② 世代の異なる先生たちに保護者支援の経験を語り聴いてもらうことで、自分の経験をふりかえります。<困ったことをことばにして他の先生に語ることで、困った経験を整理することができます!>
- ③ ①と②を通して、明日からの保護者支援をがんばろうという気持ちをもてるようにします。

## 3 ワークショップの流れ

ワークショップを実施する時間を、約3時間としました。これは、ワークショップのねらいを達成するために、あるいは多忙な学校教師が自主参加するのに無理のない時間の長さとして、土日祝日の半日、平日の就業後に捻出できる時間から考えました。公的な研修であれば、講義を組み入れるなどして1日のプログラムにすることもできます。

- ① オープニング（15分）趣旨説明、グループづくり
- ② 自己紹介（20分）グループごとに自己紹介
- ③ 保護者支援の経験のふりかえりシート記入（15分）個人作業
- ☆ 休憩 ☆（10分）
- ④ 1ラウンド 保護者支援の経験交流（15分）一人目の語り
- ⑤ 2ラウンド 保護者支援の経験交流（15分）二人目の語り
- ⑥ 3ラウンド 保護者支援の経験交流（15分）三人目の語り
- ⑦ 4ラウンド 保護者支援の経験交流（15分）四人目の語り

- ⑧ グループ内での全体交流(15分)
- ⑨ 経験交流のふりかえりシート記入(10分) 個人作業
- ⑩ 経験交流の分かち合い(30分)
- ⑪ クロージング(10分) グループからの報告

## 4 グループの人数

私たちのワークショップでは20名程度の参加者を想定しています。この場合、メインとなるファシリテーターを1名、サブのファシリテーターを1~2名とするとスムーズに運営できます。

1グループ4名とし、4名で割り切れない場合は1グループ5名で実施します。この場合、5人目の語りを「3 ワorkshopの流れ」にある「⑧ グループ内での全体交流」にあてることがができます。

## 5 場づくり

会場は、面積が少し広い部屋(各グループが椅子に座って、互いに邪魔にならない程度の広さを必要とします)を用意します。会場の最初のレイアウトは、人数分の椅子を1つの輪になるように置きます。そして、来室した方から順次座っていただくようにしています。なお、机が用意されている部屋の場合は、机を壁にそって置いておき、ひとりでふりかえりシートを記入したいという参加者が使えるようにしておきます。

時間に余裕がある場合は、参加者全員でこれらの会場づくりを行うのも良いと思います。

グループ分けが終わった後は、グループごとに椅子を持って集まってもらい、円形のダンボール板「えんたくん」\*を使って、経験の交流を行っていきます。

「えんたくん」\*とは、川嶋直氏らが考案し、2013年に誕生した直径1メートルの円形ダンボール板です。対話を促進するツールとして開発されたものです。えんたくんのメリットの1

つとして「世代や立場といったふだんの上下関係を、話し合うテーマに向けた「対等」な関係にリセットできること」と、中野(2019)は説明しています。

## 6 準備するもの

- ・ 「ワークショップの趣旨・ねらい」～各自に1枚
- ・ 「保護者支援の経験のふりかえりシート」～各自に1枚
- ・ 「経験交流のふりかえりシート」～各自に1枚
- ・ 「ワークショップの流れ」「語り合いの約束」を書いた模造紙(パワーポイントで作成することもできます)
- ・ えんたくん～グループ分
- ・ グループの記入用紙(えんたくんの上に載せて使います。参加者が気づいたことなどを記入していきます)～グループ分
- ・ マーカー～5色程度のセットをグループ分
- ・ A4の用紙～人数分
- ・ 鈴(ラウンドの切り替えに使います)～1点

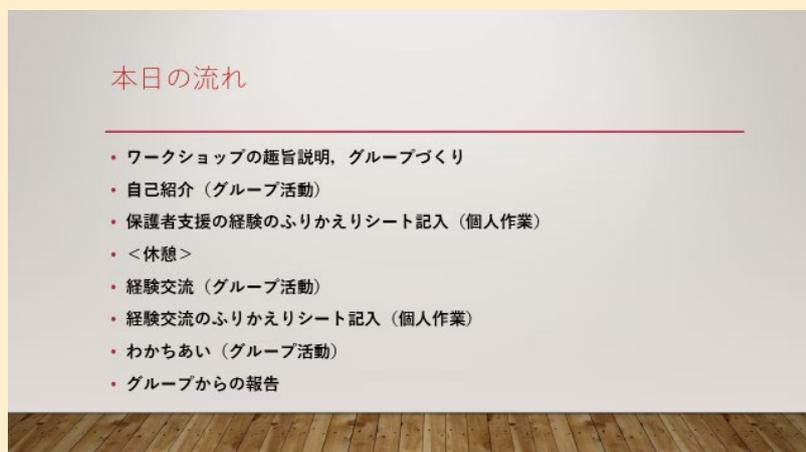
### ワンポイントアドバイス!

この他に、筆記用具、メモ用紙等を適宜必要数、用意できるといいです。また、大きめの時計を用意しておく、参加者と時間を確認し合いながらワークショップを進めていくことができます。

## 7 事前の準備

グループ分けを行うために、事前に、参加者の氏名、教職経験年数と勤務している学校種を一覧にしておきましょう。

「ワークショップの流れ」「語り合いの約束」を模造紙に書いておきましょう。パワーポイントで作成することもできます。



## 8 ワークショップの進行

### 8-1 オープニング(15分)

ワークショップを開催する趣旨説明を行い、合わせてワークショップのねらいを説明します。参加者が学校において課題意識をもっている保護者とのかかわりについて、異世代、異校種の教師たちが語り合うことで、今後の展望をもてるようにすることを、ファシリテーター自身のことばでわかりやすく説明していきます。

趣旨とねらいを書いた用紙を配布し、それを使い説明していくこともできます。

次に、ワークショップの流れを説明し、参加者にワークショップのイメージを持ってもらいます。

#### ワンポイントアドバイス!

趣旨とねらいの説明は、わかりやすく短い時間で行っていくことが大切です。ここであまり時間をかけずに、次のグループ分けに移行し、開始からあまり時間がたたないうちに、参加者の動きをつくっていくことで、参加者の自発性・自主性を引き出すようにしましょう。

1 グループ 4 名を基本としますが、割り切れない時には 5 名のグループをつくりま  
す。グループ分けは、1 つのグループが若手、中堅、熟年という異世代、そして、幼稚

園, 小学校, 中学校, 高等学校, 特別支援学校という異校種の教師たちで構成できるように行います。グループ分けは事前にファシリテーターが行っておくとスムーズにワークショップを運営出来ますが, 参加者の自主性・自発性を大切にするには, たとえば事前に若手の教師だけをファシリテーターがグループに分けておき, ワークショップを始めてから, まず中堅教師に異校種の若手教師がいるグループを探して入ってもらい, 最後に熟年教師にグループを選んで入ってもらうという方法も考えられます。

グループのメンバーが決まったら, 参加者に椅子をもってグループごとに集まり小さな輪をつくって座ってもらいます。それぞれのグループにえんたくとその上に載せて使うえんたくんと同じ大きさの記入用紙を, 1 セットにして渡します。グループはそれをひざの上に載せて, 語り合う場をつくります。合わせて, マーカーも 1 セット渡し, 好きな色を選んで使ってもらいます。

### ワンポイントアドバイス!

川嶋・中野 (2019) ではえんたくんを使うときに 3 つの約束「よく聴こう・短く話そう・ことばを書き留めよう」を設定し, えんたくんの中央に書いてもらいます。私たちのワークショップでは, このうち「よく聴こう」「ことばを書き留めよう」を伝えます。

## 8-2 自己紹介 (20 分)

グループで自己紹介を行います。この自己紹介は, この後続く, 保護者支援の経験交流に向けた活動になります。グループのメンバー同士がお互いに関心を持ち, 安心して語り合えるように自己紹介を行います。

中野 (2017) が, 大学授業で行うグループワークで実施している自己紹介の方法を参考にして, 自己紹介を考えています。参加者各自が A4 の用紙を 4 つに折って, 1 つ 1 つの枠の中に次のことをそれぞれ記入していきます。そして, これを使って自己紹介をします。

自己紹介の方法は, 多様な方法を考えられますので, ファシリテーターが工夫してみましよう。

## ワンポイントアドバイス！

グループのメンバーのことを理解し合い、このメンバーたちだったら、このような保護者支援の経験をお話しようと思える自己紹介の内容、方法を考えましょう。メンバーの顔触れによって、お話をしたいと思う保護者支援の経験はかわるかもしれません。

### 8-3 保護者支援の経験のふりかえりシート記入

(15分)

ここでは、経験交流を行うために、参加者ひとりひとりが保護者支援の経験を思い出しながら、ふりかえりシートを記入します。ファシリテーターはグループのメンバーに話をしたいと思う保護者との経験を思い出してもらえるように伝えます。そして、シートに書いたことを、グループの中でひとりずつ順番に発表することをファシリテーターは伝えます。

保護者支援の経験のふりかえりシートには、次の6つの項目を入れてあります。

- ①その保護者とどのようなことがありましたか？
- ②その時のあなたの感情や思いはどのようなものでしたか？
- ③その時にあなたはどうしたかったのですか？
- ④その時の保護者の思いはどのようなものだったと思いますか？
- ⑤保護者とあなたの認識や思いにズレはありましたか？
- ⑥他の先生方にアドバイスをして欲しいことがあれば記入してください。

## ワンポイントアドバイス！

記入時間を15分としていますが、この後に休憩時間を入れてありますので、ゆっくりと進めていきましょう。経験した当時の感情や思いが呼び起こされ、文字にして書き記すのに少し時間を必要とする場合もあるかもしれません。

保護者支援の経験のふりかえりシートと経験交流のふりかえりシートは、それぞれの先生が自分でふりかえりを行うためのものです。シートに記入したものを他のメンバーに見せたり、ファシリテーターがシートを見たり集めたりすることはありません、ということを最初に伝えておきましょう。

### 8-4 保護者支援の経験交流(60分)

保護者支援の経験交流をグループごとに行います。まず、経験交流の約束を確認します。

- ①お互いの経験、考え、感情を大切に交流しましょう。
- ②発表者が語り終る最後まで聴きましょう。質問は、発表者の話しが終わってからにしましょう。
- ③質問をされても話したくないことには、応えなくて結構です。

ノーコメント!OKです。

- ④語ったこと、語れたことはここで閉じていきましょう。

経験交流をひとりずつ順番に15分で語っていきます。発表を交代する合図として、鈴を鳴らします。4人のグループは、全員が語り終わった後に全体交流を行います。5人グループはそのまま最後のメンバーが語ります。

グループで経験を交流しましょう。

- |          |       |    |               |
|----------|-------|----|---------------|
| 最初の15分間  | ひとりめ  | 発表 | 1番目に教職経験の長い先生 |
| 次の15分間   | ふたりめ  | 発表 | 3番目に教職経験の長い先生 |
| その次の15分間 | さんにんめ | 発表 | 1番教職経験の短い先生   |
| 最後の15分間  | よにんめ  | 発表 | 2番目に教職経験の長い先生 |

- ・※経験交流の約束を決めます。
- ・※思い浮かんだことを「えんたくん」に書き留めましょう。

### ワンポイントアドバイス!

経験交流の約束は、大切な経験を安心して語り合うために必要なことです。ファシリテーターは、参加者が安心して語り合っているかに気持ちを向けましょう。

発表の順番は、グループで決めてもらうこともできますが、若手教師が話しやすいような状況をつくりましょう。

## 8-5 経験交流のふりかえりシート記入(10分)

経験交流のふりかえりを個人で行います。ふりかえりシートには次の項目があります。

- ①どれ程、自分の経験を伝えることができましたか。
- ②どれ程、他の先生の話をお聴くことができましたか。
- ③どれ程、他の先生に自分の経験を聴いてもらえたと思いますか。
- ④他の先生たちの経験を聴いて、どのようなことを考えましたか?
- ⑤保護者支援で、これから大切にしていきたいことはどんなことですか?

- ⑥後輩の先生に保護者支援についてアドバイスしたいことはどんなことですか？
- ⑦その他、経験交流の感想を自由に書いてください。

### ワンポイントアドバイス!

問い、つまり保護者支援の経験のふりかえり、経験交流のふりかえりの項目は、ワークショップでの学びを深めることにつながります。

異世代の教師たちの語り合い、学び合いが深めるふりかえりの項目をファシリテーターが工夫してみましょう。

## 8-6 経験交流の分かち合い(30分)

経験交流のふりかえりシートを使って、ふりかえりを行います。

そして、最後にグループのメンバーへのメッセージをえんたくんに書き入れ、メッセージを伝え合います。



## コラム3

### ワークショップに参加して

鎌田良子

カウンセラーでもない限り、人の語りを聞く時にこのように意識することがあるでしょうか。このワークショップの一番大切なことは、相手の話を遮らずに、丁寧に聞きとる行為だと思います。聞き取ってもらった方は聞いてもらった満足感だけではなく、新たな感情が生まれます。それは、自分の語りで自分を内省している点だと感じました。ディスカッションとは違いますが、自分が安心して受け入れられ聞いてもらっていることで、自分のエピソードに気づきが生まれるのが不思議です。タイムテーブルがあり、話す時間に一定の区切りがあるというのも、自分中心に話さないという暗黙の了解のようです。年齢に関係なく、対等に時間が設定されていることも、参加者に更なる安心感をもたらしているのかと思います。保護者支援の経験交流研究会のメンバーとして、このワークショップが更なる広がりを見せて、保護者支援の語らいが教職員の間で気軽に進んでいくことを願っています。

宮崎世司

このワークショップによって、保護者支援の経験を見直すと共に、より広い視野で物事を捉え、考えることができました。

私は12年の教職経験の中で、子どもたちと向き合い、また保護者との関わりの重要性にも気づき、日々大切にしてきました。しかし、様々な保護者のニーズに対応することは、時に困難となったり、反発を生んだりしてしまうこともありました。社会情勢の変化、地域・保護者等の環境の変化など様々な背景がある保護者支援において、現場経験の長い教員や大学教員などが交流できるこのワークショップは、大変価値のあると感じました。更には、今後のネットワークツールとしても生かすことができるのが、大変魅力を感じます。異世代異職種がつながりをもつことで、この先の様々な困難をも乗り越えていくことができ、未来を創造していく子ども達のためにもなる、そんな素晴らしいきっかけになると感じました。

## 篠塚友希野

私は、小学校の特別支援学級の教員をしていて、今年で7年目です。児童との関わりや指導方法はもちろんのこと、保護者との関わりや支援の仕方における悩みは絶えません。しかし、このワークショップへの参加を通して、幼稚園・保育園・小学校・中学校・特別支援学校それぞれの先生と交流し、アドバイスをいただくことができたので、とても勉強になり、自信につながりました。

不登校の児童に関する保護者支援では、特別支援学校の先生から「福祉サービス等の機関に協力をお願いする方法」を教えていただき、子ども同士のトラブルに関する保護者支援では、幼稚園の園長先生から「保護者の気持ちに寄り添うことの大切さ」を教えていただきました。

どの学校種でも、保護者支援での悩みは共通しているようですが、他の学校種や異世代の先生に相談することで、違う視点での考え方や支援方法を知ることができたので、参加して本当に良かったと思います。

## 渡部良子

ワークショップに参加して私は毎回、「あの時もっとどうにかならなかったのか、この対応でよかったのか。」という苦い経験が思い出され、お話をしています。ずっと心に引っかかっていたものを吐き出すかのようです。同じグループとなった先生の一人も、「保護者対応で現在悩んでいる。聞いてほしい。」という思いで、このワークショップに参加していらっやっていました。もちろん職場内でも、様々な相談がなされており、具体的な解決策が考えられているのですが、そこから離れた第三者的な立場の、しかも同業者で気持ちを理解してくれる相手に話をすることには、大きな意味があると感じます。

つまり、このワークショップの第1の意義は、具体的対策よりは、世代を超えた同業者に、気持ちを汲んでもらうことにあるのかもしれない、と思いました。ある先生は感想で、「今日はここに来てよかったです。気持ちがすっきりしました。」とおっしゃっていました。対人職である教師は、日々保護者、児童生徒、同僚との良い関わりを求められます。それは時にはとても苦しいものです。今回のワークショップのように、約束を互いに守りながら閉じた形で、気持ちを開いていく機会が保証されると、心の健康を保っていけるのでは、と考えます。

## 砂川 敬恵子

私は、異校種&異世代教師たちの保護者支援に関する経験交流を目的にしたワークショップに参加して、いろいろな気付きがありました。まず、グループでは、「えんたくん」という丸いテーブルを囲みます。自然と和やかな雰囲気を作ってくれます。私は、自分が困った出来事を話題に選びました。自分の記憶を思い浮かべ語ることで、自身の思い込みや他者へ意識を向けて考えるきっかけを見付けることができました。また、それぞれの先生の思い、保護者にかかわる方法や考え方には、その先生の実践からの振り返りが含まれ、説得力がありました。保護者、子ども、教師の関係が良好に循環していくための原動力になるのは、教師の意思だと思います。先生方の語りに共感し共有した情報の中に、教師の教育への強い意思を感じ、それが原動力となって教師から子ども、保護者への良好なかかわりが形づくられていくことがわかりました。

ワークショップと一緒に参加した皆様、ありがとうございました。教育実践に生かして生きたいと思います。

## 三井 理恵

教職 25 年目を無事に向かえ、素敵なワークショップに巡り会うことが出来た。小学校教師としての 25 年間の経験を振り返る特別な時間となりました。私はこれまでワークショップに 3 回参加しました。1 回目は、初めて出会う方々に緊張していましたが、自己紹介をしていくうちに心がほぐれ、異世代間の様々な経験知や校種の違いの面白さを知り、自分が一番困難を極めた経験について語る事ができました。2, 3 回目は、事前に話す場面を想定し、自分が経験してきた事柄や思いを積極的に語っていきました。私は、このワークショップでこれまで抱えてきた困難やつらかった状態を越えていく自分に気がつきました。自分の苦しい経験や思いを語る場所は今まで存在していなかったのです。

私は、ワークショップに参加して経験年数や校種の違いの中から、保護者支援という共通のものが存在していることを発見しました。また、コミュニケーションを通して、経験知を類型化しながら共通事項を見つけ、個から集団を支援するという支援観を広げていく事ができました。そして、課題や困難を抱えている教師には必要不可欠な時間であると実感する事ができました。今後もこの素敵なワークショップの展開を楽しみにしています。

## 引用文献

- ANTONUCCI, T. C., LANSFORD, J. E., and AJROUCH, K. J. (2010) Social Support. In FINK, G. (Ed.), STRESS Consequences: Mental, Neuropsychological and Socioeconomic. New York: Elsevier. (尾久征三(訳) 2013 ソーシャルサポート(社会的支援) ストレス百科事典翻訳刊行委員会編 ストレス百科事典, 精神医学的・臨床心理的・社会心理的・社会経済的影響 丸善出版)
- ASPINWALL, K. (1986) "Teacher Biography: the In-service Potential," Cambridge Journal of Education, Vol. 16, pp. 210-215.
- 堀公俊(2008) 日経文庫 ワークショップ入門 日本経済新聞出版社
- JOHNSON-BAILEY, J.(2010) In ROSSITER, M. and CLARK, M. (Ed.) Narrative Perspectives on Adult Education: New Directions for Adult and Continuing Education. Willey Periodicals, Inc., A Wiley Company (立田慶裕, 岩崎久美子, 金藤ふゆ子, 佐藤智子, 萩野亮吾訳 2012 成人のナラティブ学習, 人生の可能性を開くアプローチ. 第7章他者の側面で学ぶこと, 洞察とエンパワメントの手段 福村出版)
- 川嶋直・中野民夫(2018) えんたくん革命, 1枚のダンボールがファシリテーションと対話の世界を変える みくに出版
- 木原俊行(2016) 第1章教師教育と教育工学の接点, 教育工学的アプローチによる教師教育の今日的展開 日本教育工学会監修, 木原俊行, 寺嶋浩介, 島田希編著 教育工学選書Ⅱ10, 教育工学的アプローチによる教師教育, 学び続ける教師を育てる・支える ミネルヴァ書房
- 文部科学省(2018) 平成28年度学校教員統計調査 <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400003&tstat=000001016172> (参照日 2018.05.10)
- 村川雅弘(2016) ワークショップ型教員研修, はじめの一步 教育開発研究所
- 中原淳(監修), 脇本健弘, 町支大祐(2015) 教師の学びを科学する, データから見える若手の育成と熟達のモデル 北大路書房

中野民夫(2017) 学び合う場のつくり方, 本当の学びへのファシリテーション 岩波書店

SPENCER, L. M. and SPENCER, S. M. (1983) Competence at work, John Wiley & Sons (梅津祐良他訳, 生産性出版, コンピテンシー・マネージメントの展開・導入・構築・活用, 2001)

植木克美, 渡部信一, 川端愛子, 後藤守(2017) 小学校教師の保護者対応における変容プロセスと世代継承 日本教育工学会研究報告集 JSET17-5:239-246

植木克美(2017a) 第1章 熟年教師が語る「見えない能力」の教育と評価 渡部信一編著 教育現場の「コンピテンシー評価」, 「見えない能力」の評価を考える ナカニシヤ出版

植木克美(2017b) 「印象に残った保護者」とのかかわりにおける小学校教師の成長と世代継承, 熟年教師と若手教師の事例比較 教育情報学 16:21-34

## 保護者支援をともに学ぶ教育者ネットワーク エデュサポネット Educator Support Network

### 連絡先

〒002-8501 札幌市北区あいの里5条3丁目1番3号

北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻 植木克美研究室

[ueki.katsumi@s.hokkyodai.ac.jp](mailto:ueki.katsumi@s.hokkyodai.ac.jp)